

特別寄稿

記者の目から見た日本のバスケット

朝日新聞スポーツ部

由利英明氏

2004年シーズンの日本バスケットボール界で、記憶に残る試合がある。全日本学生選手権の男子準々決勝、慶応義塾大学（以下慶大）対青山学院大学（以下青学大）戦だ。第3クォーター途中まで、青学大が個人能力の高さを全面に出した。関東2部リーグではあったが、優勢に試合を進めていた。

しかし関東覇者の慶大も志村雄彦主将を中心に奮闘した。慶大はスポーツ推薦入学がないため層の薄いチームだが、コートを転がるボールに食らいつき、ラインを割ろうとするボールにも飛び込んだ。そのたびに代々木第2体育館の観衆を沸かせた。次第に、慶大への声援が強まっていった。

青学大もルーズボールへ執念を見せたが、慶大は初めの一步の早さで勝った。試合の流れは傾き、第4クォーターに慶大が逆転。つかんだ勢いで、45年ぶりの頂点に駆け上がった。

私は昨年夏までの2年間、米国ロサンゼルスで駐在生活を送った。大リーグ取材が中心だったが、NBAも見ることができた。慶大対青学大戦を観戦しながら、ワシントン・ウィザーズで現役生活を終えたスーパースター、マイケル・ジョーダン氏の言葉を思い出した。

「技術が下手でもいい。若い選手には戦いへの気迫を見せて欲しい」。NBA人気を支える根本的理由は、生存競争を勝ち抜いた者だけが見せられるシンプルな戦いの姿勢だろう。慶大に声援を送ったファンは、ひたむきにボールを追う単純な闘争心に共感したに違いない。その慶大が優勝を決めた全日本学生選手権決勝は、会場が満員に膨れあがっていた。

「バスケットは見るスポーツではなく、するスポーツ」、こう話す人がバスケット界の中にもいる。サ

ッカーや野球のようなメジャースポーツの座を断念する声だ。しかし、あきらめるのは早い。慶大の試合を見れば、一般ファンが何を求めているかが分かる。

人気獲得に向けて、日本バスケット界のシステムは改良点が少なくないと思う。スーパーリーグの選手の多くはプロ、または契約選手なのに、新潟アルビレックス以外のチームは実質、会社の福利厚生の一環にすぎない。これでは一般ファンの共感は得られない。

さらに、企業対企業の戦いでありながら、ホーム・アンド・アウェー制を名乗っている。一般ファンに他人の企業の応援を強いるシステムには無理がある。

これらは決してバスケット界だけの問題ではない。しかし、リーグの構造は時代遅れになりつつある。それはファン軽視にもつながっていると言える。さいたま市を主会場に開く2006年男子世界選手権の資金繰りの厳しさも、そんな姿勢から来ているのかも知れない。

NBAは、選手も球団も、そしてリーグも、プロ化されている。ファンは地域名のついた地元チームを応援する。この単純さがわかりやすい。米プロスポーツのすべてが正しい、という見方は間違っているが、一般の人が理解しやすいシステム作りは参考にするべきだ。

バスケット人気は日米で、雲泥の差がある。だが、選手自身の技術は確実に差がなくなってきている。特に日本の若手はシュート力も含めて急速に進歩している。

慶大の竹内公輔、東海大の竹内譲次の兄弟のように、将来のNBA入りが期待される大型選手も出てきた。小さくて素早いのが日本人、という固定観念はもう古すぎる。大きな選手でも世界に勝負できる時代が、来つつあるように見える。

国内で高いレベルの競争を続けられれば、田臥勇太選手に続くNBA入りも夢ではない。実際、米国のマ

イナリーグで挑戦する日本選手も増えてきた。将来性ある若い選手のために、日本バスケット界はどんな舞台を用意できるのか、が問われている。

その中で、日本協会の傘下外であるbjリーグには、勢いがある。日本初のプロリーグを目指すだけに、優秀な外部識者の声を集め、十分に時間をかけて開幕日を迎えつつある。

リーグが成功するかどうかは別として、スタッフはまさに生き残りをかけている。新リーグの情熱には感心させられる部分が少なくない。

トライアウトに参加したある選手が、こう言っていた。「NBAが最終目標だから、プロリーグでやりたいし、プロ選手じゃない人とは一緒にやりたくない」。こう話す選手は、今後ますます増えるだろう。bjリーグが若い選手の思いをくみ取っているという事実は、否定できない。

一方の日本協会側は、確かな将来像を示していない。プロ化検討実行委員会の設置を華々しく発表したのが、3月末まで途中経過は明かさないとした。一度はつかんだファンの関心を、長い沈黙の間に自ら手放したのではないか。選手自身も、こんな対応では将来が不安だろう。

さらに、プロ化のことも含め、情報発信が少なすぎる。例えば、日本代表候補選手や監督選びについても、その選考過程をできるだけ明らかにし、注目を集める努力をするべきだ。決まるまでの過程をあれこれと推測しながら、楽しむ人は少なくない。

スーパーリーグとbjリーグ。二つのリーグが並立できるほど、日本のバスケット市場は大きくない。さらに、bjリーグが失敗すれば、日本でのプロリーグ化は難しいとも見られる。それは日本バスケット界全体のイメージダウンにつながるだろう。一般ファンにとって、日本協会の傘下であろうが、なかろうが、あまり重要なことではない。おもしろい試合が見られるか、見られないのか、が大切なことだ。選手の立場なら、いいプレイをできる環境があるか、そうでないのか。ファンや選手の思いをいかに具現化するかが、当然プロリーグ成功の鍵となる。

すでに、メンツや派閥、学閥といった問題では片付けられないところに来ている。バスケットという大きなくくりで団結しなければ、一般ファンの意識はどんどん離れていってしまう。

休部したボッシュを率いていたジョン・パトリック氏が、かつてこう語っていた。「米国の強豪高校には、1学年100人以上のバスケット部員がいる。その中で生き残った者だけが大学に進み、NBAでプレイできる。だから、必要とされる闘争心が、日本とは比べものにならない。」と。闘争心！！パトリック氏の言葉は、実は選手だけに向けられたのではない、と今思う。日本の若い選手が、本来持つはずの闘争心をいかに発揮できるか。その舞台を提供しなければならない要職の方々に訴えた言葉だったかも知れない。